

Alert 反天皇制運動 44号

[通巻 426 号]
2020 年
2 月 4 日発行

第 4 期・反天皇制運動連絡会

湯浅欽史さんが去年 11 月 23 日に 84 年の生涯を終えたという連絡は、かつての小さな読書会「技術論研」のメンバーから来た。その集まりが、私と湯浅さんの酒をまじえた出会いの場であった。その会場は、反天連のスタートの空間でもあった「高円寺ボックス」。会のネーミングはいつだったか忘れてしまったが、戸坂潤をとりまとめて読み続けていた 70 年代後半、早大の理工系の大学院生らとのほんの数人の読書会からそれは始まった。戸坂ら「唯物論研究会」の「科学技術論」と新左翼にも強い影響を与えた武谷三男らの技術論とを比較検討し、熱心に論議していた。都立大の造反教官だった、「たまごの会」で活動していた湯浅さんらのそこへの参加は、「理論」研究の場からリアルな科学・技術論の検証の場にそこを転換させる契機となった。反原発・反コンピュータのテキストをあれこれ読み漁り、討論する時間が何年も続いた。

長く没交渉になっていた湯浅さんと再会させたのは〈3・11〉原発震災であった。私は病身を引きずって反原発運動にも突入し、その渦の中で原子力資料情報室を手伝っていた、すでに心臓手術後の彼と、また交流しだした。今度は酒ナシでゆっくりと。私がかんている「再稼働阻止ネットワーク」のニュースの制作を彼は死の直前まで積極的に手伝ってくれていた。雑務をとてつもなく律儀に、楽しげにこなす人であった。原理的エコロジストなのに、タバコと車（それもスピード運転）が大好きといった、奇妙に分裂的人生をニコニコ生きた不思議な人でもあった。

ただ〈あの時代〉から「全共闘」の問いに答えるべく〈思想と行動〉の人生を生き、土木工学の専門研究はやめ、専門論文はまったく書かなかった人であったこと。私はこの点を忘れるわけにはいかない。

僕は、もう少しガンバレそうです。湯浅さん。（天野恵一）

今月の Alert ●ヘイトと権威主義のパンデミックこそ警戒し対抗しよう——*2

反天ジャーナル ●——よこやま みちふみ、ななこ、橙*3

状況批評 ●文化・伝統のレイシズム——小倉利丸*4

書評 ●福富節男『僕がデモ屋になったわけ』について——有馬保彦*6

太田昌国のみたび夢は夜ひらく（116）

●ひたひたと社会に浸透する（いかがわしさ）——太田昌国*7

マスコミじかけの天皇制（43）（壊憲天皇制・象徴天皇教国家 批判 その 8）●

〈重臣リベラリスト〉南原繁の一九五六年「紀元節」演説を読む——天野恵一*8

野次馬日誌*9 集会の真相*10 学習会報告*11 反天日誌*12 集会情報*12



250 円

●定期購読をお願いします（送料共年間 4000 円）

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net

●以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の

Alert

ヘイトと権威主義のパンデミックこそ 警戒し対抗しよう



これまで感染症が世界的に蔓延していった経過には、単純な交易にとどまらない植民地などの経済政策が大きな役割を果たしたことが知られている。その罪はいまだ償われておらず重大である。しかし、病気を媒介するのが細菌やウイルスなどであれば、少しばかりの公衆衛生や治療環境の整備と、個々人の日常的な対応によって、その危険性のほとんどは抑え込むことができるというのが現在の知見だろう。もちろん、それすらも叶わないことがしばしばあるというのは、疾病における歴史的社会的不正なのだが。

これらなかなか達成が及ばない現実を前提としながらも、それをさらに「悪性」のものとしていくことは許されない。短期間の国際的な「緊張緩和」が過ぎ去ると同時に、反動として憎悪と恐怖の政治がやはり国際的に巻き起こされ、その繰り返しも自由や平等といった価値が毀損させられていくというのは、これまでも何度もあったことだが、その頻度が増しているのは、やはり「情報化」と人の移動が独占資本と独裁国家の下で大々的に展開されている、今世紀の二〇年のことだろう。いま、中国湖北省武漢市での「新型肺炎」のウイルス感染の発生を前に、きわめて醜悪な社会的状況がつくられている。

それは例えば、感染者にとどまらない中国人全般に対する世界的な「嫌悪」として

すでに現れている。中国などの経済的政治的影響力の増大に対する「警戒」の言説は、これまでもあったが、アメリカのトランプ政権のめちゃくちゃというしかない「自国優先」と他国を敵視する政策によりさらに拡大した。「敵国」をつくり出すことにより権力者への求心力をもたらしうとする政策は、独裁体制において顕著だが、これが世界的に拡がっている。国内的には、それは他者に対するヘイトとなり、とりわけ日本国家の中では、在日コリアンや中国・韓国・朝鮮人たちに対して限りなく拡大するヘイトクライムとなっている。現在それは、人の移動ばかりでなく中国に関連する多数のものの「入国禁止」を求めるゼノフォビアの言説として繰り広げられつつある。ウイルスによってもたらされる疾病や症状よりも、インターネットことにSNSによって広げられ流通する「嫌悪」や「恐怖」のほう、ウイルスよりも「変異」が早く、そのもたらすものは、すぐに発現しないとしても個人や社会の中に深く沈潜して、おぞましい結果を生みだしていくのではないか。

インナーサークルに利権をもたらし、少しでもその利害に背くものには、脅迫や懲罰的権力の発動を平然とする安倍の支配体制が、揺らぎながらも、その飛沫によりむしろ腐敗をまき散らすかっこうで続くなか、こうした社会情勢を利用しようとする策動もまたなされている。典型的には、徳仁の即位のさいの「国民祭典」において延々と「万歳三唱」を繰りひろげた伊吹文明による、憲法に「緊急事態」の条項を加える形での改憲策動である。今回の一月三〇日の発言におけるそれは、もちろんすぐさま批判を浴びているが、感染症のひろがりや、自然のもたらす大災害の発生など、あらゆる機をとらえ社会不安をかき立てながら、いつなんどきリアルなものとして立ち現れるかは予断を許さない。

● 私たちは現在、二月一日の「紀元節」には「代替わりに露出した天皇神話を撃つ! 2・11反『紀元節』行動」を、さらに、徳仁の誕生日である二月三日には、これまでの代替わり過程に力を尽くしてきた「おわてんねっと」を締めくくる「天皇のいない民主主義を語ろう」討論集会を開催しようとして準備中だ。

それぞれの集会の開催の主体こそ違え、めざすところは同じものをさしている。恥知らずで野放図な政治や資本の暴力と、それにびつたりと寄り添う天皇制の権威主義的国家は、「他者」を閉じ込め、批判者から自由を収奪しながら形成されていく。これらを許さない取り組みを、ほんの少しずつでも拡大し影響をもたらしていこう。あらためて集会への参加と開かれた議論を呼びかけたい。

(編 蝠)

英洞中の地を歩くということ

年の瀬に、イスラエルおよびパレスチナを訪問する機会を得た。

イスラエルとパレスチナについては、つい先日
トランプ米大統領による「二国家共存」を掲げる中
東和平案が発表されたが、これまでは、この二国家
間の歴史的経緯と関係がよく理解できていなかった。
イスラエルユダヤ人とパレスチナアラブ人
という二つの陣営に分かれて民族的・宗教的に対立
している、といったような通俗的な理解の範疇に留
まっていた。しかし、現地での限られたスタディツ
アーのなかで、その経緯や背景がおぼろげながらも
も見えてきた。

では、現在にいたる「イスラエル―パレスチナ問題」の起点はどこにあるのだろうか。諸説あるが、そのひとつが、一九一七年のバルフォア宣言（イギリスがユダヤ人にパレスチナ国家建設を認めた宣言）を起点とする考え方である。詳説はできないが、つまり、ヨーロッパの中東における植民地主義の帰結として生み出された問題とする見方である。過中の地に立てば植民地という行為が過去のものではなく、現在進行形であるという重い現実を突き付けられる。そういえば、「中東」という地域概念も一九世紀以降にイギリスなどがインド以西を植民地化するにあたって考え出した概念であった。

(よこやま みちふみ)

「一緒」にするな！

なかなか行動に参加できずにいる今日このごろ、ボートとついていたテレビで「オリンピックまで半年」イベント、全国一二四のテレビ局で一齐に同じ番組が始まって、ちょっと静かになったところで「○※×△◆はんたい〜!」と聞こえた。うん? 確かに誰か言ったよね? 聞き慣れた零囲気の声。やってるやってる! すげ〜! 全国のテレビついているところではかなりこの場面をみてるってわけでしょ。やったじゃん!

しかしこの番組、かなり気持ち悪かった。「一緒にやろう2020」というコンセプトなのだが、「例えば、一緒に世界をきれいにしてみよう。心も綺麗に、街も綺麗に。みんなが敬意を払い合う社会も、ゴミのないきれいな街も、一緒なら、夢じゃない」とHPにある。冗談か？ 不都合なものに蓋するのが大得意なこの国のやり方そのものだ。野宿者や汚染土の詰まったフレコンバッグを隠して「ゴミのないきれいな街」にするつもりなのだ。そんなことに加担したくはない。「一緒に強制しないでくれ。前から同調圧力に弱い国民性からすると、こういうのはかなりやばい。この狂騒の後には多くの人たちがそのツケを、いろいろな形で払わせられるのだ。それも「一緒に」ってか？ 勘弁してよ」

(ななこ)

(ななこ)

目糞鼻糞「愛子天皇待望」論

週刊誌やインターネット上では、愛子天皇待望論がポツポツ出まわっている。「ヨウツツジの会」は、愛子を次代天皇にするための「皇室典範改訂を求める署名を呼びかけたりもしている。

「今のままでは皇位継承者も皇族もいなくなるぞ」というのは、まあみんな考えていること。だから天皇制維持派の多くは「女性・女系天皇、女性宮家を」となるわけだけど、ゴヨウツツシの会は「愛子天皇を」にぶっ飛んでしまふ。なぜ秋篠宮や悠仁をぶっ飛ばして愛子なのかといえは、現天皇の「直系」だから、というのだ。

なるほど、「男系が女系が」よりも「男系が直系が」なのだな。「血筋」が大事、「直系」が大事、でもって「男系男子」にこだわっているとすべてを失う。となれば「男系」を外して「直系」の「長子主義」がいいと。え？ フェミっぽい？ 嘘でしょ。まあ、目糞鼻糞の域だよな。

子どもの頃はよく言われた。勉強しなさい、学歴は生きるために必要なのだと。だけどこの社会で大事なことは、男子であることと、どんな家系の何番目に生まれたかなんだって、天皇一家はずっと教えてきたのだった。で、この国の住民はみんなよく学んでいるってわけ……。親の説教よりもウンザリな話だす。

(橙)

状況批評

思想・状況批評

文化・伝統のレイシズム

小倉利丸

●生前退位「お言葉」の再読

何度も議論され、批判もされてきた明仁の生前退位表明だが、あえてもういちど下記の文言をとりあげてみたい。

「即位以来、私は国事行為を行うと共に、日本国憲法下で象徴と位置づけられた天皇の望ましい在り方を、日々模索しつつ過ごしてきました。伝統の継承者として、これを守り続ける責任に深く思いを致し、更に日々新たな日本と世界の中にあつて、日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし、いきいきとして社会に内在し、人々の期待に応えていくかを考えつつ、今日に至っています。」

明仁が「国事行為を行うと共に」と述べていることに注目したい。彼は天皇に国事行為以外に天皇の重要な役割があることを明言した。そのあとに「日本国憲法下で象徴と位置づけられた天皇の望ましい在り方を、日々模索」と続ける。憲法では象徴天皇の国事行為は、内閣が責任をもって助言して行なわれる国事行為であるはずだ。しかし、明仁はそのようなものとして天皇の象徴的行為を考えていない。憲法の枠に縛られた国事行為の外にも、天皇が主体となる象徴的行為があることを明言した。これは、象徴としての天皇の行為は、憲法によって制約しえない領域を含み、憲法の外部にあつて憲法を超越する、とも解釈できる言い回しだ。戦後民主主義を体現する天皇であるかのように解釈されてきたが、少なくとも、晩年の彼は天皇の象徴的行為の憲法超越性を自覚していたのではないか。ここでいう憲法を超越するといっても、それは、政治的な権力が法を超越するという意味ではなく文化や伝統に内在する象徴権力の超越性を含意させている。

「伝統の継承者」を天皇に与えられた役割だと述べているところは見逃せない。天皇が想定している聞き手はもっぱら日本国民であると同時に、その圧倒的多数を占める（構築されたものとしての）エスニック集団としての「日本人」

である。「日本文化」に属さない「文化」や「伝統」は天皇にとって「守り続ける責任」を有さない。そして、「日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし」という皇室を主語とする表現は、日本文化総体を念頭に置きつつ、その中心に皇室の文化を据えた表現だ。ここには文化のヒエラルキーも含意されている。しかも、こうした伝統の継承者として「いきいきとして社会に内在」することを使命にするという。社会に内在した皇室は、当然のこととして、日本の文化や日本に固有の価値を伝統としつつ日本社会にこれを内在化させることを通じて「継承」を実現する主体になる。主権在民の理念はここにはない。ここに戦後憲法の本音が透けてみえる。

天皇が日本国民統合の象徴でありながら、同時に「伝統の継承者」でもあるということとは、日本が天皇や皇室の伝統を共有する単一民族から構成されているという虚構を肯定した排除の言説、あるいは日本文化を最上位に置いて諸々の文化をその下位に位置づける差別の言説でもある。これを国民統合の象徴の役割としての天皇が担うということは、統治機構のあり方として、差別や排除が構造化されることを意味している。天皇が「伝統」を口にすることとは、国民統合をいわゆる「日本文化」を共有する「民族」や社会集団に限定し、それ以外の社会集団の存在を排除するか差別するという構図を統治機構のなかに持ち込むことを意味している。「伝統の継承者」とは、異なる文化の排除の表明であつて、レイシズムの言説なのだ。

この戦後の皇室の発言や振舞いに体現されている文化や伝統をめぐるレイシズムは、戦前戦後を通じて憲法が国民統合を、そもそも法によって規制することのできない特異な宗教的な主体である天皇の象徴機能を与えた結果である。この意味で問題の根源は、戦前であれ戦後であれ憲法そのものにある。

●徳仁のばあい

現在の天皇、徳仁も皇太子時代に「伝統」や「文化」を次のように用いている。

「京都府は、我が国の政治や文化の中心地として、千年を超える歴史を有し、海を越えて渡来する文化を取り入れながら、日本文化の基本を形成してきた「このふるさと」と言える地域です。また、長い歴史を通じて、常に時代の変化に対応し、今なお、伝統文化の中心であるとともに、新しい文化を創造し続けています。（中略）京都では、「このふるさとを整える」文化発信」という大変奥深いテーマを掲げて取り組んでこられました。日本文化と日本人の精神性を見直し、次の世代に継承するため、大切にしたい日本の「このふるさと」のメッセージを募集し発信するなど、多彩な取組が進められていると伺っています。（二〇一一年国民文化祭、京都：宮内庁ウェブより）」

「海を越えて渡来する文化を取り入れながら」という文言は、文化的な多様性を肯定するかのよつにみせながら、むしろ「日本文化」が様々な文化を同化させてきた優位的な位置にあることを評価している。右にあるように何度も「このふるさと」という言葉を使い「日本人の精神性」という表現すら用いている。皇室が「日本人の精神性」に言及したことはほとんどない。宮内庁のウェブでみるかぎりこの一箇所だけだ。「物」を介した文化から人間の感性や心情に直接関わる文化領域へと踏み込んでいる。この言葉から戦前の「日本精神」を連想するのは過剰反応と思う一方で、かといって全く無関係と言いきれるかどうかは、この言葉が受け手によってどのように解釈されるのかによるだろう。今の日本には「日本精神」を許容する危うさがあるように思えてならない。

あるいは次のような徳仁の「伝統」という言葉の使い方にもレイシズムが隠されている。

「現在の世界の水問題は、大変厳しい状況にあります。その解決は、世界の喫緊の課題であり、国際社会が一致して、強固な連携を図りつつ、ことに当たることの重要さは今更言うまでもありません。しかし、その解決策は、その地方、その河川流域ごとに異なるはず。その地域の先人達が、場合によっては数千年の歴史をかけて、宮々として築きあげてきた流れにそって構築されるべきものでありましょう。それぞれの地域の歴史の流れと伝統が尊重されなければ、本当に地域に役立つものとはならないはず。第4回世界水フォーラム全体会合基調講演：宮内庁ウェブより」

ここでは、ある地域に数千年の単位で生活してきた人々による「伝統」に注目している。言いかえれば、その地域に新たに居住するようになった人々を言

外に伝統から逸脱する人々であり、水問題の解決の主体になりにえないかのような印象を人々に与えている。天皇や皇室が繰り返す「お言葉」は、ほとんどの「日本人」にとって違和感のない、むしろ退屈ですらある「常識」の類であることが多い。しかし、こうした日本の「伝統」や「文化」の言説がレイシズムを支える大衆意識の基層を構成してきた。

● グローバル化する極右と天皇制

冷戦終結以降、世界規模で目立つ政治的な動きは、民衆の反グローバル化・シオン運動が明確なオルタナティブを社会主義として掲げなくなるなかで、新自由主義グローバル化・シオンを左翼とはある意味で真逆のベクトルで批判する極右の台頭である。明らかに左翼の衰退の隙をついて極右が政治的影響力を強めてきているのだ。

極右は、経済のグローバル化・シオンを「マクドナルド化」にみられるような画一的な消費文化、格差、貧困、移民の流入によるコミュニティ固有の価値の破壊として批判し、テロリズムや法制度を通じた移民排斥を実現しようとする。人々は自分が生まれ育った場所で、その場所の文化や伝統を重んじながら暮らすことが最も幸福なありかただとし、市場経済競争よりも、文化や伝統に依拠した民族的アイデンティティの再構築を通じてコミュニティの再建を主張する。近代科学技術を環境破壊の元凶とみなして伝統文化のなかに解決を探そうとする。リベラリズムと民主主義を敵視し、家長制家族制や権威主義を肯定する。米国の福音主義がある一方で、ヨーロッパの極右の一部には近代世界に加担したキリスト教を否定し、キリスト以前へのヨーロッパの古層への回帰、ヨーロッパの原型を北欧やアラブ、インドなど非西欧文化や宗教に求める異教主義的な傾向もある。

「文化」が伝統主義や極右の政治運動と結びついて運動の駆動力として復興しつつあるとき、日本では、裕仁から明仁への代替わりが重なった。グローバルな極右の台頭のなかで、象徴天皇制が世界各地の資本主義延命の文化運動とシンクロしはじめていることに注目したい。天皇制の構造は、見掛けと違って日本に固有とはいえない側面がある。神話や伝統への回帰を武器にするレイシズムと闘う世界の運動と日本の反天皇制運動とが共通の課題を見出すことは難しくなくなっている。むしろ連帯の可能性が広がっている。このことは、伝統主義と闘う左翼の運動にとって大きな希望だと思つ。



福富節男『僕がデモ屋になったわけ』について

有馬保彦（市民の意見30の会・東京）

一九六〇年代から今までベトナム反戦運動などの市民運動を牽引してきた福富節男さんの、運動誌に書かれた運動状況に則した発言をしたもの、各運動をまとめ共同行動を促すために発せられたものなどをまとめた文集（『デモと自由と好奇心と』一九九一年、第三書館に所収されていないもの）を、昨春秋、計画から一年余りを要してしまっただが、ようやく出すことができました。

六〇年の「声なき声の会」から「ベトナムに平和を！市民連合」へという、いわゆる市民運動形成史が語れることが多くあります。その中で、福富さんはどのような運動史の位置にいるのか。また、市民運動と呼ばれている運動が、どのような他の運動体と共に闘いを形成しようとしたか、を考えるうえで、参考になる文集になったと私は考えています。

当該文集の編集後記に、福富さんを「もつともベ平連的人物」と私は評しました。この視線も考えて文集を編みましたが、それは、ベ平連を語る際、小田実や鶴見俊輔、吉川勇一らは語られることが多くありますがそれだけでよいのか、福富さんを語らずして、ベ平連が語れるのか。実際に運動を担った人々はそう思うはずです。ベ平連で福富さんとともに活動をした、七〇年代高校生であった岡本和之さんは、『若者』がデモや集会の準備を担

うのだが、福富さんはいつもその場にいたからだ（『本の紹介』『市民の意見』一七七号）。と回想しています。私も同感です。

私がベ平連の集会に参加する中で、はじめに福富さんの姿を見たのは、一七歳ごろ。集会やビラなどでは、福富さんの肩書は、「ベトナム問題に関する数学者懇談会」（「ベトナム」という名前が多くありました。後に神楽坂のベ平連事務所に入出入りをするようになり、ベ平連の福富さんという認識になりましたが、その福富さんが、後の日大全共闘の闘いにつながる六二年の日大数学科事件の当事者であることを知るのは、だいぶ経ってからです。

ですから、単に「市民運動」だけではなく、学生運動などのつながりも考えていた福富さんですが、六〇年代後半から七〇年代初頭の、「反安保、ベトナム反戦」を掲げた、さまざまな市民運動、各大学の学生運動・労働運動（諸セクトも含む）を繋げた「6月行動」。それは八〇年代以降にも続いていきます。その回想が当文集に回想されています（「デモン・ストレーションと民主主義——僕が「デモ屋」になつてから」）。

福富さんは、アジア太平洋戦争のさなか、フィリピンでの戦場体験があります。その体験からくる天皇制批判や戦争批判も持続しています（当文集「餓死した英霊たち」を読む）。

最後まで、福富さんは「デモ屋」でした。小田実の葬儀後のデモの時、「かつての若者の望みを耳にして、私はデモの届け出もよし、責任者になろうと決心した。しかしデモの初めの挨拶やコールをするのは遠慮したかった。しかしデモの列がととのった以上、ぐだぐだしていても始まらない。出発の合図もコールの音頭もやった」（小田実さん追悼特集『市民の意見』、当文集所収）。

ぜひ、この文集を、今、各運動を担っている方々に読んで頂きたいと思います。

*ベトナム数学者の結成のいきさつや活動の仕方については、渡辺毅「福富節男さん、有り難う」「市民の意見」一六八号特集三所収、また、引用した『市民の意見』一七七号については、一六八号とともに「市民の意見30の会・東京」に在庫があります。FAXで有馬（市民の意見30の会・東京、FAX 03-6424-5749）までご連絡いただければ、郵送いたします。

『僕がデモ屋になったわけ』

ピープルズ・プラン研究所 特別パンフ No.2

定価800円

TEL:03-6424-5748/FAX:03-6424-5749

e-mail: ppsg@jca.apc.org

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 116

ひたひたと社会に浸透する「いかがわしさ」



昨二〇一九年五月、アイヌ施策推進法（以下、アイヌ新法）が施行された。内閣官房アイヌ総合政策室は、それに伴う基本方針案に関わるパブリックコメント（意見公募）を昨夏行なった。北海道新聞は情報公開請求を行なって、寄せられた意見の内容を調べようとしたが、六三〇五件の意見のうち98%は公表しないとの回答を得たという。理由は、それらのコメントが基本方針案に言及せず、「アイヌ民族は存在しない」「アイヌ民族は先住民族ではない」「アイヌ民族への差別はなかった」などの「差別的で」「法の趣旨に反する」意見で占められていたためであるという（一月一八日付け北海道新聞朝刊）。昨年の国会審議において、同政策室は「民族としてのアイヌ民族はいない」とする発言はヘイトスピーチ（差別煽動表現）に当たるとの見解を示しており、それに沿った方針のようだ。

アイヌ新法では、土地の権利やサケの捕獲などの先住権の保障が明記されていない。この点に関しては、十勝管内浦幌町の浦幌アイヌ協会が、先住権の確認を求める訴訟を今春四月にも起こそうとしており、それをも契機にしてさらに議論が深められる必要性があるだろう。ここでは、昨今のさまざまな言動から判断するなら、総体としてはおおよそ信頼に値しない「内閣官房」ですら公開を憚るコメントが

なぜかくも多数寄せられたのかという問題を考えた。それは、もちろん、六〇〇〇人有余の個々人の主体性に基づく行為というよりは、意見公募への参加を促す呼びかけがネット上で行われたからであろう。事実、私が調べた限りでも、特定の数人ほどの人物が意見提出の呼びかけを熱心に行っている。それは、私たちの「運動圏」でも行われていることであり、そのこと自体が問題なのではない。そこから、どんな意見が寄せられているかが、問題の核心である。歴史的な事実をどう踏まえているか、人権尊重の観点が貫かれているかなどが、その意見の可否の判断基準となるだろう。

ネット上で検索できる範囲でその典型的な意見の例を挙げてみる——「偽アイヌ」「成りすましアイヌ」に対する「野放図なバラマキ」を止めよ／「北朝鮮や中国、ロシアにもアイヌの子孫は存在し」ているので、同民族の先住民族性を認めると「北朝鮮や中国が北海道を子孫の土地だと主張する口実を与える」から、アイヌを先住民族として認める法整備を止めよ／「アイヌ協会の幹部には、北朝鮮の基本理念であるチュチェ（主体）思想研究会と深い繋がりを持つ人物がいる」から、へたな権限をアイヌ民族に与えるな etc.——

この種の意見には既視感がある。排外主義的な「日

本単一民族国家論」に基づいて、特定の民族に対する憎悪を煽るものである。彼ら／彼女らからすれば、七年以上も持続している現政権は、民族・国家論において同一陣営に属するはずなのに、アイヌ民族の「先住性」を一部なりとも認めるようなアイヌ新法を制定したことへの疑問と批判があるのだろう。アイヌ民族運動の背後に潜むチュチェ思想云々の箇所などは、本来ならば噴飯物の言い草に過ぎない。だが、一九九〇年前後以降、劣化するばかりの保守・右翼言論が広く社会に浸透したがゆえに現在の政治・思想状況があると思えば、どんな珍妙な考えも軽視すべきではない。そう言わざるを得ないほどに、社会状況のいかがわしさは極点に達している。

相模原市の障害者施設・津久井やまゆり園の殺傷事件を引き起こした被告が「障害者は家族や周囲に迷惑をかけている」という考えを内面で固めたのは、米大統領選に立候補したトランプの言動を聞いてからだという（一月一七日付け朝日新聞夕刊「取材考証」および一八日付け同紙朝刊）。「不法移民の入国を阻止」するために対メキシコ国境に壁を作るなどの排外主義的なトランプ発言に、社会の底流に存在しているながらタブー視されていることで公然とは口にできないことを、よくぞ言ってくれたとの思いを抱いたのだろう。被告は事件の五カ月前に衆院議長に宛てた手紙で「障害者四七〇人の殺害予告」をしているが、この計画を「ぜひ、安倍晋三様のお耳に伝えること」を望んでいる。被告は日米のふたりの政治家に、身勝手な一方的な思い入れをしたのだろうか。〈いかがわしさ〉には伝播力が備わっていて、知らずして互いに惹き合う／惹かれ合うのだろうか。

（一月三十一日記）

「重臣リベラリスト」南原繁の一九五六年「紀元節」演説を読む

「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その8



天皇「代替わり」の政治プロセス下の「2・11」がまた近づいている。今年の私たちの「実行委」の名称は『代替わり』に露出した『天皇神話』を撃つ！2・11反『紀元節』行動」だ。

敗戦と占領で、国家レベルでは消滅に追いこまれた「紀元節」セレモニーが東京大学というレベルでは残っていたという事実。それは敗戦の年（一九四五年）東大総長となった南原繁の総長演説が残されているので確認できる。私は、その南原の『新装版文化と国家』（初版一九五七年・新装版二〇〇七年（東京大学出版））をキチンと読みなおす作業をした。あの「天皇の侵略戦争・植民地支配」への思想的反省がどういふかたちでなされたのかを具体的に確認してみるために。もちろん「新日本文化の創造——紀元節における演説」（一九四六年二月一日）なるものが存在していること自体が、まっとうな反省の不在を示しているという判断を前提に。

ただ、東大法学部の実任者であった南原は、天皇機関説の美濃部達吉について、「神がかり天皇主義右翼グループ」からねらわれ続けた「リベラル」な政治学者であることは、よく知られている。だから敗戦後、占領下にふさわしい総長ということだったのだろう。

「そもそもわれわれの祖先は、わが民族を永遠の昔より皇室を国祖と仰ぎ、永遠に生き来たものと信じ、最近までさように教えられて来たのである。それは必ずしも伝つることく、今日が二千六百年で

はないかも知れぬ。果してどこまでが歴史の真実であつて、どこまでが神話と物語であるかは、実証的歴史学や比較史学の研究にまつべき事柄であつて、この方面においてわが国の歴史は今後徹底した批判的研究が遂げられなければならない。／しかし、たといその結果がどうであつても、われわれの問題は、それらの神話や歴史に盛られた意味、いわば民族の世界観の意味内容である。重要なのは、われわれの祖先の抱いた理想——当時の自覚していた文化階級が自己の民族の永遠性を信じ、その天的使命を意識し来つたという点である。いやくも民族の発展を庶幾（こいねが）い、世界に貢献せんと欲するほどのまじめな国民にして、自己の精神的使命と悠久の生命を理想とし、そのための努力をしない国民があるだろうか」（傍線引用者）。

南原は、史実と神話を区別すべきで、神話を事実のように語る非科学（実証）的態度は、決定的にしりぞけている。しかし、政治的神話（彼が「一種の選民思想と誇大妄想」とここで非難している）に流れる、皇室を中心にまとまつた、民族の「理想」と精神的活力を超歴史的に実体化し、肯定的に評価することに躊躇はない。露骨な排外主義というその内容を拒否しているだけなのだ。一九四六年の元旦の詔書（いわゆる「人間宣言」）については、こうだ。

「……本年初頭の詔書は、さる重大な歴史的意思をもつものといわなければならぬ。すなわち、天皇は『現人神』としての神格を自ら否定せられ、天

皇と国民の結合の紐帯は、いまや一人人間としての相互の信頼と敬愛である。これは日本神学と神道的教義からの天皇御自身の解放、その独立の宣言である。／それは同時に、わが国文化とわが国民の新たな『世界性』への解放と称しえるであらう。なぜなら、ここで初めて、わが国の文化がわれに特殊なる民族宗教的束縛を脱して、広く世界に理解されるべき人文主義的普遍の基礎を確然と取得したのであり、国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成しえる根拠を、ほかならぬ詔書によつて裏づけられたのである」（傍線引用者）。

「臣民」の「国際市民」への転換がなんと身分制秩序のトップ天皇（王）の「詔書」によつて根拠づけられた、というのだ。なんという政治的倒錯。

南原の敗戦直後の他の発言に目をやれば、彼が平和天皇の「御聖断」が人々を救つたという、支配者がたれ流し続けている「戦後神話」のいち早い語り部であつたこと、彼のいう「人間＝人権」の尊重が、「君民共治」（天皇と国民の一体化）がデモクラシーであるとするための媒介の論理以上のものでないことが、ハッキリと読みとれる。

「重臣リベラリズム」（「日英同盟」をテコに進進帝國主義諸国と組んでいくことを目指した天皇をとりまいた重臣たちのリベラリズム）の戦後への延命。象徴天皇制デモクラシー（「君民一体」イデオロギー）へ、今、戦後民主派の少なからぬインテリが君主（天皇）に対峙するデモクラシーという立場を投げ捨て、合流しだしている。今おきているその支配的な流れは、大日本帝國憲法（神権天皇制）への回帰ではなく、南原ら戦後民主主義者があらためてつくりだした「重臣リベラリズム」への合流である。

1月1日～1月31日

1月1日～1月31日

【1月1日】

天皇、皇族◆徳仁、雅子が皇族や三権の長らから新年の「祝い」を受ける「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿で開かれる。

徳仁◆即位関連行事を無事に終えたとして安堵を示すとともに、前年は国内外の多くの人々と会い、温かい祝福を受けたと振り返った。

【1月2日】

天皇、皇族◆新年恒例の一般参賀が皇居で行われ、徳仁が雅子や明仁、美智子、秋篠宮、紀子ら皇族と宮殿・長和殿に立ちあひさつ。約6万8千人が訪れた。

悠仁◆宮内庁が、悠仁が作った新春の盆栽「春飾り」の写真を初めて公開。

【1月9日】

徳仁、秋篠宮◆安倍晋三首相や閣僚、副大臣らを皇居・宮殿の小食堂「連翠」に招き、昼食会を催す。秋篠宮が同席。

宮中昼食会◆安倍晋三首相が、皇居で行われた宮中昼食会に出席。

【1月14日】

天皇、皇族◆徳仁、雅子が、年頭に当たり皇居・宮殿「松の間」で「講書始の儀」に臨む。秋篠宮、紀子ら他の皇族も出席。

【1月15日】

「帰国の記憶」◆安倍晋三首相が、中東3カ国歴訪を終え、皇居で「帰国の記憶」。

【1月16日】

天皇、皇族◆新春恒例の「歌会始の儀」

が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、徳仁、雅子や皇族、一般の入選者らの歌が披露される。

秋篠宮、紀子◆阪神大震災25年の追悼式典に出席するため兵庫県に入り、防災科学技術研究所兵庫耐震工学研究センター（同県三木市）を視察。

【1月17日】

天皇、皇族◆宮内庁が、天皇一家と明仁、美智子がそれぞれの住まいで黙とうしたと明らかに。

秋篠宮、紀子◆神戸市中央区の兵庫県公館を訪れ、「1・17のつどい―阪神大震災25年追悼式典」に出席しあいさつ。

【1月18日】

上皇侍従◆福島県警捜査2課長の山田樹が上皇侍従に就く宮内庁人事が公表される。

【1月20日】

天皇一家◆東京都千代田区の有楽町朝日ホールを訪れ、「キヤッツ」のチャリティー試写会に出席。

徳仁◆第201通常国会が「召集」され、参院本会議場で行われた開会式で、徳仁が「お言葉」を述べる。

【1月21日】

「立皇嗣の礼」◆政府が、皇位継承に關する式典委員会を首相官邸で開き、4月の「立皇嗣の礼」の次第概要を決める。1991年の「立太子の礼」と比べ、「賓客」と食事と共にする「饗宴の儀」の回数や招待者数を削減、立食形式も導入し、簡素化したと報道。

侍従次長◆元国連政府代表部大使の別所浩郎が侍従次長に就き、侍従次長の加地正人が依願退職する宮内庁人事が公表される。

3・11追悼式◆菅義偉・官房長官が記者会見で、政府が主催する東日本大震災の追悼式について、発生から10年となる翌年までとし、それ以降は見直しを検討する考えを示す。

【1月22日】

徳仁、雅子◆埼玉県所沢市の国立障害者リハビリテーションセンターを訪れ、入所者らの職業訓練を視察。同センターと併設する国立職業リハビリテーションセンターの創立40周年の記念式典に出席。

秋篠宮、紀子◆東京都文京区の文京シビックホールで開かれた第60回交通安全全国民運動中央大会に出席。

【1月23日】

佳子◆東京都文京区の東京ドームを訪れ、「東京国際キルトフェスティバル」布と針と糸の祭典」の開会式に出席。

【1月23日】

天皇誕生日◆宮内庁が、2月23日の天皇誕生日に皇居・宮殿で実施する一般参賀の要領を発表。

皇室「献上」品◆福井県坂井市の魚問屋で、県特産の冬の味覚「越前ガニ」を徳仁、雅子や皇族に贈るため釜ゆでする作業が行われる。

【1月24日】

徳仁、雅子◆皇居・宮殿で、農業や畜産

業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。

【1月25日】

徳仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。

【1月27日】

悠仁◆宮内庁が、悠仁にお茶の水女子大付属中1年Ⅱがインフルエンザの診断を受けたと明らかに。

佳子◆東京都千代田区の憲政記念館を訪れ、「第42回聴覚障害児を育てたお母さん」をたたえる会に出席。

【1月28日】

秋篠宮、紀子◆前年浸水被害に遭った福島県伊達市を「私的」に訪問。

【1月29日】

「立皇嗣の礼」◆宮内庁が、天皇代替わりに伴う儀式や祭祀の細部を詰める「大礼委員会」の第9回会合を開く。

【1月30日】

明仁◆宮内庁が、明仁が29日夕、皇居・吹上仙洞御所で一時意識を失って倒れたと発表。

【1月31日】

秋篠宮◆福岡市東区の水族館「マリンワールド海の中道」を訪れ、視察。

佳子◆東京・池袋のサンシャインシティ文化会館を訪れ「第69回関東東海花の展覧会」を鑑賞。

信子、久子◆故寛仁の妻信子と故高円宮の妻久子が東京・池袋のサンシャインシティ文化会館で「第69回関東東海花の展覧会」を鑑賞。

美空の「暴徒」

年末年始香港に行ってきた

.....

この年末年始、香港に行ってきた。直接的な目的は、一年ほど関わってきた香港人靖国抗議弾圧に関連して、送還された二人の被告人（郭紹傑さんと嚴敏華さん）に会い、現地で報告会を持つためである。弁護士と支援者八人でツアーを組んだ。もちろん、現在進行形で大きく動いている香港の運動の現実を、一目見たいという気持ちも強かった。私たち「靖国抗議見せしめ弾圧を許さない会」（見せしめQ）は、二人を支援するための組織で、現在の香港の運動についての見方や評価はさまざまある。しかし郭さん・嚴さん、そしてかれらの友人たちも現在の運動には積極的に関わっており、連日、運動関係者と顔を合わせる機会に恵まれた。

二月二七日の早朝、香港に着いた私たちは、午後、郭さん・嚴さん、二人の家族たち、そしてかれらの運動仲間と一緒に、この春から始まる控訴審に向けての相談会もあった。私も二人には東拘での面会と判決公判以来だから、握手したりハグしたりするのはもちろん初めて。

翌二八日には、旺角（モンコック）の香港教育專業人員協会で、見せしめQ主催の裁判報告集会。香港側からは「維護二戰史実聯席會議」の何俊仁さん、香港城市大学名誉教授の鄭宇碩さんが発言。

見せしめQからは裁判報告を一瀬敬一郎弁護士、救援会の活動報告を私が行った。そして郭さんと嚴さんが並び立ち、控訴審に向けた決意表明。

翌日からはフィールドワークである。

二九日は、嚴さんの案内で新界地区にある馬寶寶（マーボーボー）農場を参観。「東北開発」反対運動の拠点の一つで、農村地帯のすぐ周辺に林立する高層ビルが迫っている。都市社会香港における農と食のありかたを有機農業を通じて提起している。ごちそうになった野菜中心のお昼ごはんもおいしかったが、今年の夏には強制撤去されようとしているとのこと。夜は郭さんの家族・友人との会食。この間の大規模デモを呼びかけている「民間人権陣線」の中心メンバーの顔も見えた。

三〇日は、見せしめQの仲間でジャーナリストの和仁廉夫さんの案内で、日本の香港軍政史跡をめぐるツアー。私は別行動で、香港中文大学の政治学の先生に会い、雨傘運動以来の市民的不服従の運動について話を聞き、別称「暴徒大学」のキャンパスを案内してもらった。夜は、この間の運動にも深くコミットしている古い友人に会って話を聞く。

三一日はマカオ。夜に戻ってくると、ホテルのある沙田（シャティン）の駅前にあるショッピングセンター前の広場に、五〇〇名ほどの若者たちが集まっている。その周りには多くの市民たち。新年のカウントダウンだ。「光復香港、時代革命」、警察を批判するスローガンが延々と叫ばれる。一二時が近づくと、一斉に携

帯のライトが灯され、広場の後ろにいた私たちには、一面の星空のように見えた。

翌日、一日は「元旦大遊行」（デモ）。

会場のビクトリア公園だけでなく、その周辺の銅鑼灣（トンローワン）一帯が、すでにデモ参加者で埋めつくされている。街のあちこちに各団体のブースが出て、宣伝活動をおこなっている。デモは、参加者五〇〇万との発表。普段はトラムが走る八車線はある大通りが開放され人で埋まる。私たちは先頭に近いほうにいたが、一時間ほど歩いて解散地点につくと、宣伝カーの上の主催者が、デモの中止命令が出たと訴えている。後続のデモ参加者に対して警察のひどい弾圧があり、催涙弾も発射されたという。この時点でもまだ、出発地点の公園は、たくさんの方が残っていたそう。結局、夜にかけて五〇〇名ほどが拘束され、その半数以上が逮捕されたと後で知った。

滞在時間もあった人もごく限られてはいたが、今回見聞きたことは大きかった。報道などに基づいてイメージしていた香港の運動や街の様子ともずいぶん違っていた。当然のことだが、事態は流動し続けている。その社会にいる人たちが、いまそこで暮らしながら歴史に参与しているのだ。そのダイナミズムの一端には、ふれることができた気がしている。

（見せしめQ／新孝二）

五輪返上ーおことわりリンク走る！

.....
開会（2020.7.24）まで半年を切っ

た2020東京五輪。私たちにとっては返上までのカウントダウンだ。というわけで、年明けから全力疾走のおことわりリンク。一月には二回の集会と一回の街頭アピールをやった。

一月二日、スポーツジャーナリスト谷口源太郎さんの新著「オリンピックの終わりの始まり」の出版記念の集いを開催。谷口さんは、本に沿いながら、まずは戦後のオリンピックがいかに政治・金まみれだったかを検証し、後半は政府の「復興五輪」というスタンスが被災者を踏みにじる政治的プロパガンダだということとを語ってくれた。

毎月二四日の反五輪デー。一月二四日はお台場で東京都主催半年前イベント開催が判明。私たちも急遽場所をお台場に移してスタンディング&アピール。式典



会場の超高級ヒルトンホテルからは三億円かけたというリングス（五輪マーク）が真正面に見え、ライトアップ点灯と打ち上げ花火が式典のメイン。私たちは見物客がてんこ盛りに集まった二階オーブントラスのど真ん中で「東京五輪反対！」

は大成功、やったかいのある痛快な取り組みになった。

翌二五日はLA報告会。昨年七月五輪開催一年前イベントに来日したZOnyias LAの仲間たちと二月、訪米した仲間が再会。一九三、一九八四に続き二〇二八年に三回目の五輪開催を目論むLAで、五輪や開発や排除に反対する人々の運動に参加・交流した井谷聡子さん、いちむらみささんの話を聞いた。五輪でコミュニケーションが破壊されるのはどうも同じだ。前日の映像を最初に見て、続いてLAのみなさんのパワフルな活動にエンパワメントされ、国際連帯の重要な

さを再確認した。本番まで五ヶ月半、みんな走り続けるぞ！。

（おことわりリンク／京極紀子）

護衛艦「たかなみ」の中東派遣 反対現地集会・デモ

ヨコスカ平和船団が出港して長浦港に入ると、呉基地所属の掃海母艦「ぶんご」が停泊していた。

アメリカ海軍が一〇月下旬からバレーン周辺海域で実施した「国際海上訓練」に参加し、巨大な旭日旗を艦橋に掲揚してペルシア湾内での艦隊航行訓練の

先頭に立った艦艇で、機雷を最大二三〇発搭載・敷設する能力をもった機雷敷設艦である。比与宇地区に建設中のSM-3ブロックII A用の新しい弾薬庫はすでに建設が終わり、土をかける作業が進んでいる。新たな自衛艦隊司令部海上作戦センターもほぼ完成し、ここに勤務する自衛官の官舎も建設が進んでいる。長浦港はいま大きく姿を変え、ほぼ自衛隊専用の港に変容しつつある。民間施設、横浜DNAベイスタースの練習場（旧日本海軍軍需部庁舎跡、戦後大洋漁業に払い下げられた）も、来年度予算で防衛省が買い取り、後方支援施設を建設するこ

【学習会報告】

思索者21 『天皇と神道の政治利用』

（花伝社、二〇一九年）

本書は「思索者21」というグループによる共同研究の成果ということだが、これは法学者である土屋英雄筑波大学名誉教授を中心とする研究会のようだ。

安倍政権などによる天皇利用による復古、それに対して護憲の立場から危惧する天皇という図式は、もはやありふれた道具立てである。本書の立場も明らかにそうで、いちいち引っかけ点が多く、楽しい読書ではなかった。ただ、それ以外の部分については、国家神道の歴史についても政教分離や主権在民原則についても、オーソドックスともいえる整理が

続く。そのほとんどは整理にとどまり、著者たちの主張が前面に出ているとはいえない（学生のレポートを読んでいるようだという感想もあった）が、その点だけは「使える」部分はある。

政治権力と天皇との関係の説明は、明治維新以来の「天皇を利用の道具と見るのは長州系の伝統」という、かなり雑な根拠によっている（安倍も長州系であるとか）。明治維新で、討幕派が天皇を玉として使ったというのはその通りだろう。「制度としての政治利用」が構造化されたのが近代天皇制であるといいたい

のかもしれない。だが、そうであればなお、近代天皇制国家における天皇という存在は、国家の外にある操作可能な道具とはもはや別物であることが意識されてもいいのではないか。

本書の主張でいけば、象徴天皇制とは、天皇の政治利用の余地を断つものとなるべきということになる。しかし、天皇の行為を「内閣の助言と承認」で縛ったことが、逆に天皇の政治利用の回路を保持することになったと整理され、天皇の「代替わり儀式」が登極令に基づいて行われたのも、神権政治への復古を図る政治による天皇の利用だという。それだけでなく、生前退位をめぐる天皇の発言は、憲法を擁護し尊重するものであって憲法九十九条に

則った行為である、自民党の憲法草案で天皇の憲法尊重義務を外したのは、そういう形で天皇が憲法に負担することを阻止するためではないかと推測するに至っては、もうねじれ切っているという感想しかもてない。

書名にある「天皇」と「神道」という近代国家の統合装置のありようは、それぞれ位相も異なっている。それぞれが近代国民国家においてどのように機能してきた（きている）のかということは、具体的に問われるべきである。「政治利用」を出発において、結論的にそのことを確認しているだけではすまないのではない。

* 次回は遠藤正敬の『天皇と戸籍』を二月一八日に読む。（北野蒼）

とが決まっている。

横須賀港に入ると、ずらりと護衛艦(駆逐艦)が並ぶ。艦長らのパワハラで乗組員が自殺した補給艦「ときわ」も修理からもどってきた。しかし、イージス艦「きりしま」は作戦行動に出たまだ。

中東に派遣される「たかなみ」に接近して自衛官に呼びかけを行った。ヴェルニ公園での派遣反対現地集会では、習志野の仲間、ピースリンク広島・呉・岩国の仲間、横須賀市議などが次々に発言。集会後、海自横須賀地方総監部前で、中東に行かないで、自衛隊の中から声をあげて、と訴えた。国会の初日、安倍首相は「アメリカ海軍に情報提供はするが、指揮統制は受けない」と答弁した。海自が中東を管轄するアメリカ第五艦隊に恒常的な情報提供を行う、つまり、第五艦隊の一員となることにならないように、今後も行動を続けたい。

(フアイト神奈川/木元茂夫)

ハルニハ

1月24日(金) ●月例アンチ・オリンピックスタンディング(集会報告参照)

1月25日(土) ●ロシアム都市

1932.1984.2028(集会報告参照)

1月26日(日) ●護衛艦「たかなみ」の中東派遣反対現地集会・デモ(集会報告参照)

東の海 INFORMATION

開催中●朝鮮人「慰安婦」の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館) / W

AM 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館

2月8日(土) ●建国を記念しない集い

19時〜竹園交流センター(TXつくば駅よりバス・竹園三丁目下車) / 藤田康元・加藤匡通 / 主催: 戦時下の現在を考える講座(090-841-1457 加藤)

2月9日(日) ●知っていますか? 「731部隊」

14時〜府中市立教育センター(京王線ほか府中駅) / 松村高夫・和田千代子 / 主催: 同実行委員会(090-1431-1607 郡司)

2月11日(火) ●「代替わり」に露出した「天皇神話」を撃つ! 2・11反「紀元節」行動

13時15分開場 / 文京シビックセンター4Fホール(地下鉄後楽園駅) / 小倉利丸 / 主催: 同実行委員会(03-348-0263)

2月15日(土) ●やっぱり持たない! 個人番号カード

18時〜文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 共催: 共通番号いらないネット、マイナンバー制度反対連絡会(連絡先: 080-5052-0270 宮崎ほか)

2月15日(土) 21日(金) ●第9回死刑映画週間 倒錯した「真理」と死刑制度

時間およびプログラムは劇場まで / ユーロスペース(JRほか渋谷駅) / 連絡先: 同館(03-346-0211)

2月22日(土) ●ニュージーニアの日本軍慰安所と戦後オーストラリアの沈黙

18時30分開場 / ココネリ第一研修室(練馬区立区民・産業プラザ3F、西武池袋線ほか練馬駅) / キャロライン・ノーマ / 主催: 「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター(03-3818-5903)

2月23日(日) ●おわてんねと解散集会 天皇のいない民主主義を語ろう

13時15分開場 / ニュー新ホール(JRほか新橋駅) / 主催: 終わりにしよう天皇制! 「代替わり」反対ネットワーク(03-3438-0263)

2月24日(金) ●月例アンチ・オリンピックスタンディング

19時〜東京駅丸の内中央口前行幸通り / 呼びかけ: オリピック災害おこわり連絡会(info@2020okowa.net)

2月28日(金)・29日(土) ●パネル展・今こそ知るべき戦時性奴隷制

28日・13時〜19時 28日・11時〜17時 / くたち福祉会館小会議室(JR谷保駅) / 主催: 天皇制と皇軍兵士の犯罪を考える会(090-3509-8209 大橋)

2月29日(土) ●地域からつくる反ヘイト運動

13時30分開場 / 豊島区民センター7F(JR池袋駅ほか) / 川崎・相模原・墨田・練馬のグループ / 主催: 差別・排外主義に反対する連絡会

●「平成」代替わりを問う連続講座 象徴天皇制と「転向」

16時30分開場 / ビーブルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 伊藤晃・天野恵一・松井隆志 / 主催: 同研究所

(03-6245-4748)

3月3日(月) ●明治公園オリンピック追い出しを許さない国家賠償請求訴訟第8回口頭弁論

11時30分開廷 / 東京地裁706号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

3月7日(土) ●「日の丸・君が代」の強制を跳ね返す 神奈川集会とデモ

13時30分〜波止場会館4F(みなどみらい線日本大通り駅ほか) / 梁聡子 / 共催: 「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会、日本基督教団神奈川教区社会委員会ヤスクニ・天皇制問題小委員会(問い合わせ: 090-3909-9657)

3月10日(火) ●関東も放射能被ばくしている 被害の今と国・私たちのすべきこと

昼の部13時30分開場・夜の部18時開場 / 豊島区民センター7F(JR池袋駅ほか) / 渡辺悦司・園良太ほか / 主催: 脱被ばくアクション実行委員会(090-8944-3866 岡田)

3月11日(水) ●3・11東電前抗議

18時30分〜東京電力本店前(JR新橋駅ほか) / 主催: 脱被ばくアクション実行委員会

3月20日(金) ●女性国際戦犯法廷とは何だったのか

18時30分〜文京シビックセンター5F会議室(地下鉄後楽園駅) / 金富子 / 主催: 「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター、(一社)希望のたね基金(03-3818-5903)